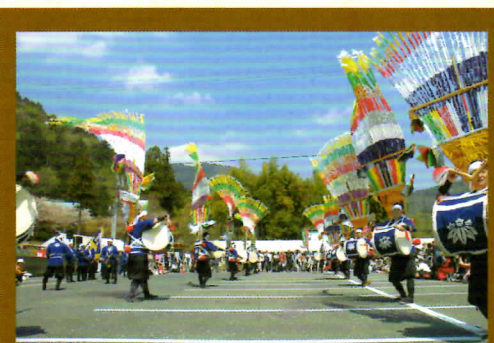


岐阜県 伝統民俗芸能大会

岐阜県が誇る「山・鉾・屋台行事」のユネスコ無形文化遺産登録を応援し、
県内を代表する伝統芸能が集結。勇壮な舞台をお楽しみください。



谷汲踊保存会（揖斐川町）



〈特別ゲスト〉和太鼓奏者 加藤拓三（恵那市）



平瀬民謡保存会（白川村）



平方勢獅子保存会（羽島市）

入場無料

整理券をお持ちの方から優先して入場していただけます。

10月24日(月)より
整理券配布開始

直接受け取る場合 「岐阜県教育文化財団企画運営課」
郵送の申し込み 返信用封筒に住所、氏名をご記入のうえ、
切手を貼り、「岐阜県教育文化財団企画
運営課」まで郵送ください。

〒502-0841 岐阜市学園町3-42 ぎふ清流文化プラザ1階
TEL / 058-233-8164



美濃市仁輪加連盟（美濃市）

日時 平成28年11月23日(水・祝) 14:00開演 (13:30開場)

【第1部】継承するもの～岐阜県の母なる言葉展vol.01
オープニングイベント

【第2部】岐阜県が誇る伝統芸能披露

会場 ぎふ清流文化プラザ 長良川ホール
岐阜市学園町3-42

谷汲踊り

岐阜県指定重要無形民俗文化財 指定年月日 昭和37年10月19日・昭和51年6月4日

谷汲踊保存会(揖斐川町) たにくみおどり ほぞんかい

伝説によれば、約800年前に伝わる武者踊で、源氏が平家を滅ぼした戦勝を祝して踊った踊であると伝える。その当時は「鎌倉踊」といって武士どもが神社仏閣の祝事や祭礼に踊ったともいう。幕末の文久年間(1961～1864)の大早魁に森の山上に千束薪木を積み重ねて焼き、氏神に祈願してこの踊を踊ったところ、たちまち大慈雨が降ったので、この踊を「雨乞踊」または「豊年踊」といった。明治初年より大正の初めまでは、年々氏神の例祭、盆、社寺の御祝儀には必ず盛大に踊ったが、大正中期以降長く中断し、昭和27年(1952)1月に保存会を起し、昭和28年(1953)氏神天神神社の社頭で再興、以後、保存会長らの尽力によって各地に出演して現在に及んでいる。鎌倉時代の源氏戦勝の武者踊に創るといって創始伝説は忠実とは考えられないが、各地にも多く行われる太鼓踊の一種に相違ない。ただ、ホラ貝を吹き、拍子木をたたき、巨大なシナイを背負いながら直径2尺2寸の大きな太鼓を打って踊り、鉦鼓をもたたくという様式には、竹中一族のような武士団が兵農分離後、農村に落ち着いて郷土舞踊として武技に類する技法を伝えたという要素は認められないこともない。

平方勢獅子

岐阜県指定重要無形民俗文化財 指定年月日 昭和31年9月7日・昭和33年4月23日・昭和51年6月4日

平方勢獅子保存会(羽島市) ひらかたきおじし ほぞんかい

勢獅子は、江戸中期に源流があり、江戸時代後期に現在のものに完成されたものといわれる。伝えるところによれば、蓮如異母弟蓮淳の五男照光が伊勢長島からこの土地に移って永照寺を開いた。この永照寺の第6代等乗の時に名主伊藤半右衛門、組頭九良右衛門、休三郎等の人々によってこの獅子舞を創作したという。この土地の門徒が伊勢長島からの集団移住であったとすれば、あるいは伊勢系の古い代神楽の類がこの勢獅子に現れていたかも知れない。永照寺を中心とした門徒の間に近在からかかる芸能が伝えられ、氏神の秋まつりに献げられて、平穏な村落の芸能として長く伝えられたものであるように思われる。演技は女獅子の一人舞もあれば、二人舞の伎楽獅子もある。お亀、ヒョットコ、村名主、天狗、大猿、小猿、狐なども現れ、演技は面白く、演技者も集団的に相当な訓練をへたものである。幣の舞、遊猿の舞、勢獅子、剣の舞、天狗の舞、五人持ち、夫婦和合の舞、狐釣り等が演技され、笛・太鼓・シメ太鼓で囃子立てる。道行きにもこの囃子がある。

特別ゲスト

和太鼓奏者 **加藤拓三**(恵那市)

岐阜県恵那市生まれ。

岐阜県恵那市を拠点に、世界各国で活動を展開している。

2008年 東京国際和太鼓コンテストにて

大太鼓最優秀賞を受賞し脚光を浴びる。

2010年 恵那市観光大使に就任。

2012年 第67回国民体育開会式にて演奏。

2015年 島サミットおよびミラノ万博、第39回全国育樹祭にて演奏。

同年、岐阜県芸術文化奨励受賞。

こだいじん

岐阜県指定重要無形民俗文化財 指定年月日 昭和37年10月19日・昭和51年6月4日

平瀬民謡保存会(白川村) ひらせ みんよう ほぞんかい

源平の戦いに敗れた平家の落武者が、この地に移り住み、今日の民謡もそこから生まれたと土地の人々は信じているが、信ずべき史料はない。古太神の名は、歌詞に唄われたという戦国時代末、白川郷の帰雲城主内ヶ島為氏と三島将監両家との確執に伴う物語から生まれたものであろう。鳩谷、飯島地区その他にも「こだいじん」が踊られているが、服装、てぶりに大きな相違がある。荻町のもは古風を残しているが、豊作を祝い生活を楽しむといった素朴さは少なく踊りに手が込みすぎている。歌舞伎おどりの影響があつて現今の踊りとして成長したものであろう。「こだいじん」は、毎年10月14・15日は荻町八幡宮で、16・17日は鳩ヶ谷八幡宮で18・19日は飯島八幡宮に奉納されているが、古くは村人の宴席や農家の庭先等で踊ったものである。囃子は三味線、尺八、太鼓、四ツ竹をそれぞれ1～2人で演ずる。踊りは傘おどりと手おどりの2種で共に4人ずつで踊る手おどりの方が素朴さが残っている。

美濃流しにわか

岐阜県指定重要無形民俗文化財 指定年月日 平成8年7月9日

美濃市仁輪加連盟(美濃市)みのしにわかれんめい

美濃のにわかは、文政(1818～1830)年間に港町若衆連の帳面にその記録がみられることから、江戸時代後期にはこの地に伝わったものと考えられる。にわかには旧暦8月1日から八幡神社祭礼の一環として、囃子と共に練習し、14・15日の例祭日に披露されたと伝えられる。囃子には春道・音羽屋・十日恵比寿・数え唄などの曲目がある。囃子の主体は明治・大正時代には大太鼓・小太鼓・笛であったものが、その後三味線の比重が大きくなった。現在の囃子の音程は昭和30年(1955)を境に一段低いものに変わったとされる。現在の例祭は4月第2土・日曜日に変更されている。にわか車に松を立て、笛・太鼓・鼓・三味線の囃子と共に町内を練り歩き、定められた場所で、見物人が丸く囲むなかでにわかを演じられる。まず、拍子木を打ち「東西、トーザイ、この場おん目にぶらさげますのは『にわか』の標題」(中略)まずは口上、後はなにやらかやめちやくちやのはじかまり、東西、トーザイ」と口上を述べ、次いで演技、落ち、引き上げの掛け声「エッキョウ」と、4つの部門で構成されている。美濃にわかは、時事風刺のきいた即興であること、その年一度限りで再演を禁止すること、口上から引き上げ掛け声まで演出が定型化していること、落ちによってそのにわかを評価すること、囃子が必ずつくことなど、美濃に伝わった当初の形態を残しつつ今日に至っている。

継承するもの ～岐阜県の母なる言葉展 vol.01～

2014年から3年間掘り貯めた、岐阜県の音と、言葉(方言や民話)と、風景のアンソロジー映像である『岐阜県の母なる言葉』の上映、撮影ドキュメントや、切り取られた言葉の展示、そして古老たちの語りとともに流れる「場の記憶」としての音(サウンドスケープ)を伝えます。オープニングイベントでは、『岐阜県の母なる言葉～総集編』の長良川ホールのスクリーン上映とともに、監督、プロデューサー等によるミニトークショーを開催します。

【問い合わせ】
公益財団法人 岐阜県教育文化財団
TEL:058-233-8164
FAX:058-233-5811
〒502-0841
岐阜市学園町 3-42 ぎふ清流文化プラザ 1階
http://www.g-kyoubun.or.jp/jimk/

ぎふ清流文化プラザ
ともに、つくる、つたえる、かなえる

■ 駐車場のご案内

- ・ぎふ清流文化プラザ駐車場(136台)
- ・駐車料金/3時間まで100円それ以降30分ごとに100円
- ・駐車場には限りがありますので、出来るだけ公共交通機関をご利用ください。
- ・障害者手帳をお持ちの方は、駐車料金の減免があります。

■ 公共交通機関のご案内[岐阜バス]

- JR岐阜駅10番のりば または名鉄岐阜(バスターミナル)Cのりば
- [三田洞線] 市民会館/長良川国際会議場方面行き
- [K50長良八代公園前][K51三田洞回地][K55彦坂真生寺]にて約20分
- バス停「メモリアル正門前」下車 徒歩1分。

